

## 看護における職業的社会化と学生の意識 — 2年課程修了前の「看護者に必要な姿勢・態度」調査から —

大澤 早苗      内山 久美      横山 孝子

看護は、多様な背景を持つ人間の生活に関わり直接的に人間と人間の関係そのものを主体とする職業である。しかし、今日の看護学生の対人関係能力はきわめて低い傾向にあるといわれている。そこで、看護教育における職業的発達の取り組みへの示唆を得るため、卒業前の学生を対象に意識調査を実施し、それを「看護職者の醸し出す雰囲気や姿勢」として定義されたPLCを指標に検証した結果、以下のことが分かった。学生が専門職者としての人間的資質として求めたものは、＜思いやり＞＜やさしさ＞などで構成される【親近感】【第一印象】のカテゴリーであった。学生は患者―看護師の二者関係が成立する最も基本的な視座を捉えることができていた。

看護における職業的社会化にとって必要なこととして、専門職業人としての人間的資質を獲得できるよう、リフレクティブシンキングができる環境を整え段階的に支援する教育システムの重要性と今後の縦断的研究の必要性が示唆された。

キーワード：青年期，職業的発達，看護基礎教育，PLC，実習教育

### I. 緒 言

看護基礎教育課程の学生は、その大部分が青年期にあるため、自己同一性の獲得という人格形成上の重要な発達課題を持つと同時に、職業同一性の形成を目指さなければならない。看護は、多様な背景を持つ人間の生活に関わり直接的に人間と人間の関係そのものを主体とする職業である。そのため、学生にとっては、この自己同一性と職業同一性を同時進行で達成させることはかなり難しい作業といえ、看護教育者が学生の人間的・社会的側面の社会化へのプロセスを理解しかかわる意義は大きいと考える。

現代の看護職には、より高度な専門的知識や技術と人間的資質の両方が求められ、この二つが看護の質を左右する重要な構成要素としてバランスよく調和されていることが望ましいとされる。しかし、高度化する近年の医療においては専門的知識や技術が優先される傾向にある。これに関し、例えば梶田<sup>1)</sup>は、看護職に求められるものとして「医療についての最新の知識や技能もある程度身につける必要があるが、同時に患者の側を向いて仕事をする事」を強調した。そのうえで「人間に対する本当の洞察力、心の内面を洞察し、深いところで患者を支えること

のできる人間としての成熟」を高等教育としての看護教育に求めると論じている。筆者らはこの論旨に依拠し、看護専門職の育成には単に知識や技術の習得のみでなく、それらと同時に人間的成熟につながる教育が必要であり、その教育のあり方が看護教育者に問われているものと考ええる。

ところが、知識や技術と異なり、人間的資質についてはその必要性が叫ばれながらも明確にされてこなかったのが現状である。河口ら<sup>2)</sup>は10年にわたる「患者教育のための“看護実践モデル”開発の試み」において、患者教育のための“看護実践モデル”の重要な構成要素として、看護職者の姿勢や雰囲気を「PLC」(Professional Learning Climate)と命名し定義づけ、現検討段階でのPLC10要素を抽出している。

河口らの提唱するPLCは、本来患者教育を主眼におき、患者に行動変容を促す熟練看護師の実践知を集約した技から抽出された概念である。しかし、筆者らはPLCの概念そのものが、その研究プロセスにおいて生活者の視点を重要視して検討がなされた点から、患者教育のみならず、すべての看護場面で必要とされる能力として一般化できるのではないかと解釈した。そこで、2年課程修了前の学生を対

象に行なった意識調査結果を、PLCを指標に検証することを試みた。そこから、梶田が述べる人間としての成熟の過程にある看護学生の意識の実態を明らかにし、今後の看護基礎教育における職業的社会的化<sup>註1)</sup>に向けた取り組みへの方向性の示唆を得たい。

## Ⅱ. 研究の意義

今なぜ、改めて「看護師に必要な姿勢・態度」を問うのか

国際的規模で、急速に患者の権利への関心が社会的に高まったのは、1980年～1990年代にかけてのことである。医療機関の動きとしては、1990年にインフォームド・コンセント（説明と同意）が基本的に承認され、この頃から保健・医療における権利主体はあくまで患者であるという患者の意思決定権を背景にした患者満足度が研究されるようになった<sup>3)</sup>。それにともない、医療機関は患者満足度を高めるために組織としてサービスの改善と向上を目指し、その第一に接遇・応対を位置づけ、他者への配慮を基盤とする専門職業人としての倫理性を重要視する傾向へと変化した。今や看護師の新人教育は、組織としても個人としても重要な基礎作りの段階とみなされ、多くの病院が新人教育においてプリセプター制度や、クリニカルラダー等を導入し、特に看護の質を左右する人的環境としてのスタッフや新人の教育に接遇を含んだ様々な工夫を凝らす傾向にある<sup>4)</sup>。

ところが、このような他者への配慮を基盤とする専門職業人としての意識が問われる社会情勢にありながら、今日の看護学生の対人関係能力はきわめて低い傾向にあるといわれている。これは看護学生に限った現象とはいえ、現代の若者特有のユースカルチャーと対人関係の希薄化が大きく関与しているものと思われる。

看護は性別、年齢を問わず、あらゆる健康レベルにある人間を対象に援助を実施するという特質を持つ。また、服部は「対人援助を専門とする職業をめざす看護学生は、もっとも人間関係を重視すべき職業人である必要がある」<sup>5)</sup>と述べている。そのため、学生はわずか3～4年の看護基礎教育の間に、人間的に未熟な傾向をもつ自己と向き合いながら、なおかつ病んだ人の心の内面を理解し深いところで患者を支えることができるだけの人的資質を獲得していく必要性を有しているのである。

筆者らが用いた「看護師に必要な姿勢・態度」とは、看護の専門的知識、技術、態度として語られる“専門的態度”に相応する能力を意味する。「看護師に必要な姿勢・態度」といえば、従来の社会通念ではマナー的意味合いが大きかったが、今日的には看護職者の基盤をなす倫理性を伴うものとして、看護における高度な質的意味合いを反映するものとされる<sup>6)</sup>。安酸は、「看護職者の醸し出す雰囲気や姿勢」として定義されたPLCの解説において、PLCとは、知識の増大や練習の単純な繰り返しによって習得できるものではなく、また多くの臨床経験があるからといって身につけているものではないとし、「専門家の雰囲気や姿勢は実践のうちに体現されている知であり、リフレクティブシンキング<sup>註2)</sup>（反省的思考）ができる環境で実践の蓄積をすることにより、身につけていく専門家の実践知である」<sup>7)</sup>としている。

人は教育さえすれば育つというものではない。教育という意図的な働きかけによって、学生が体験を単なる体験として終わらせるのではなく、リフレクティブシンキングができることによって初めて経験として位置づけ、自己の行動変容を導くことができるようになるものと思われる。筆者らは、学生が他者への配慮を基盤とする専門職業人としての意識を持ち、看護の質を左右する人間的資質を育ていけるよう段階的に支援する教育システムの意義とその重要性を、今改めて再認識する必要があると考えている。

## Ⅲ. 研究方法

### 1. 対象

2年次生（2年課程）の看護科学生41名中39名（回収率95%）。学生の背景を表1に示す。

項目	内容	人（%）
年齢	平均年齢	24.1歳
	年齢幅	18～44歳
性別	男性	9（22）
	女性	32（78）
教育課程	高校衛生看護科	12（29）
	准看護師学校	29（71）
実務経験	有り	9（22）

## 2. 調査日

平成15年12月5日

## 3. 方法

データの収集には「看護者に必要な姿勢や態度についてイメージするもの」と題し自由記述式調査（カード形式用紙の配布）を実施。分析は、調査の結果得られた初期カード（368枚）を、意味内容の類似性（KJ法）によって分類コード化した。その結果得られたコアカテゴリーを安酸らの「PLC」（表2：PLCの10要素要旨参照）を指標にして検証した。それぞれの分析過程は3名の研究者で話し合い調整し、歪みを防ぐようにした。

## 4. 倫理的配慮

学生に研究目的およびデータの活用方法について口頭で説明し、調査への協力を依頼した。

## Ⅳ. 結 果

初期カードとして整理された項目数は368枚、サブカテゴリー74項目に分類し、カテゴリーとして14項目を抽出した。

さらに《人間的資質》と《専門的能力》のコアカテゴリー2項目に大別された（表3）。

### 1. カテゴリーレベルの結果

- 1) 《人間的資質》として抽出された7項目のカテゴリーは、下位カテゴリー数の多い順に、【親近感】【パートナーシップ】【第一印象（さわやかさ）】【受容的態度】【向上心】【話術】【信頼】であった。
- 2) 《専門的能力》として抽出された7項目のカテゴリーは、【対象を理解する力】【専門的技術】【看護観】【専門的知識】【看護倫理】【支える】【見守る】の順であった。

### 2. サブカテゴリーレベルで抽出された中で、下位カテゴリー項目数が多いのは、

＜思いやり＞＜笑顔＞＜傾聴＞＜やさしさ＞  
＜受容＞＜向上心＞＜学習意欲＞  
＜相手の立場に立つ＞の順であった。

### 3. 《人間的資質》に含まれる初期カード：

総数260枚／368枚（71％）

《専門的能力》に含まれる初期カード：

総数108枚／368枚（29％）

## V. 考 察

今回、「看護師に必要な姿勢・態度についてイメージするもの」として学生に行った意識調査の結果では、《人間的資質》と《専門的能力》のコアカテゴリーが抽出できた。今回は本テーマと関連する《人間的資質》について、PLCの10要素『心配を示す』『尊重する』『信じる』『謙虚な態度である』『リラックスできる空間を創造する』『聴く姿勢を示す』『個人的な気持ちを話す』『共に歩む姿勢を見せる』『熱意を示す』『ユーモアとウィット』を指標に検証する。

ここでの『』はPLCの10要素、“”は10要素の説明文の抜粋、《》はコアカテゴリーを、【】はカテゴリーを、＜＞はサブカテゴリーを示す表記とする。

### 1. PLC との対比

《人間的資質》のコアカテゴリーは、7項目のカテゴリーに分類された。特に【親近感】【パートナーシップ】の2項目の初期カード数が多く、【第一印象（さわやかさ）】【受容的態度】【向上心】と続き、【話術】【信頼】の2項目は前記する5項目に比べ少なかった。

1) 【親近感】【第一印象】は、PLC要素①『心配を示す』⑤『リラックスできる空間を創造する』に相応：『リラックスできる空間を創造する』とは、“患者が緊張を和らげ安心して感情を表出したり、落ち着いて自分のことを振り返ったり、看護師とうちとけた対話をしながら今後のことを考えるため”の行為であり、応対場所への配慮、目線の高さや椅子の位置といった患者との物理的距離の調整、心地よい対応としての身だしなみや声の大きさ・調子、言葉使いへの配慮等が含まれる。調査結果の中で、【親近感】【第一印象】には＜思いやり＞＜やさしさ＞＜笑顔＞のサブカテゴリーが多く抽出されていた。＜思いやり＞＜やさしさ＞として対象が感じるものはPLCの要素『心配を示す』に相応する。『心配を示す』は、“気遣い・ケアリング”として患者に向けられるもので、安酸は“看護職者が専心する気になることは、看護専門職としての責任感や倫理観に裏打ちされ、患者の幸福と成長・発達への願いや望みを抱きながら心配を示すことによって表現される”としている。相手を大切にする関わりとして、

表2 PLCの10要素要旨

項目	要 旨	項目	要 旨
1	心配を示す	6	聴く姿勢を示す
2	尊重する	7	個人的な気持ちを示す
3	信じる	8	共に歩む姿勢を見せる
4	謙虚な態度である	9	熱意を示す
5	リラックスできる空間を創造する	10	ユーモアとウィット

引用文献：安酸史子，患者教育研究会：患者教育に必要な看護職者の Professional Learning Climate，看護研究，36：227-230，2003より一部抜粋

表3 「看護師に必要な姿勢・態度」－2年課程修了前の意識－

人間的資質				専門的能力	
カテゴリー	サブカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー
親近感	思いやり	第一印象 (さわやかさ)	笑顔	対象を理解する力	相手の立場に立つ
	やさしさ		清潔感		他者への関心を持つ姿勢
	誠実さ		挨拶		先入観を持たない
	目線		明るさ		対象の見つめ方(人間・生活感)
	素直		健康		患者への関心
	自信	受容的態度	茶髪だめ		公平さ
	温かさ		傾聴		気配り
	親しみやすさ		受容		個別性・その人らしさ
	ゆとり		共感		家族も含めて捉える
	正直		人の話を聞く		上下にならない
パートナーシップ	落ち着き		同感		不安を与えない
	責任感	向上心	向上心	専門的技術	説明力
	尊重		学習意欲		柔軟性
	客観的		積極性		判断力
	協調性		探究心		技術
	冷静さ		社会情報に敏感		洞察力
	接遇	話術	関心	看護観	観察力
	謙虚さ		自分へのきびしい態度		応用力
	けじめ		話題性		指導力
	ふれあい		言葉使い		感性
	毅然と		ユーモア		看護観
	一貫性	信頼	会話がうまい	専門的知識	知識
	慎重さ				根拠がある
	時間を守る			看護倫理	倫理
	約束を守る				支える
				支える	支える
				見守る	見守る

初期カード：368枚、サブカテゴリー：74枚、カテゴリー：14枚

社会的に求められている他者への配慮を基盤とする専門職業人としての意識に通じるものと考え。

それ以外にも学生は＜温かさ＞＜誠実さ＞＜明るさ＞＜清潔感＞等、人的環境としての心地よさに関連する要素をサブカテゴリーとして表現しており、患者と看護師との信頼関係を築く際のきっかけとして、基盤的要素ともいえる親しみやすさを表現したものが多かった。安酸は、“物理的・心理的な環境の調整をしながら『リラックスした空間を創造する』ことは、患者に「大切にされている」「尊重されている」と受け止められ、感情の表出や行動変容に影響すると考えられる”とする。患者と場を共有することは看護職者との心理的距離を近づける意味でも有効であると考え。人間と人間の関係そのもの

を主体とする看護においては、この親近感や第一印象がよくなければ患者－看護師の二者関係は成立しにくいものといえ、最も基本的な視座を捉えているものと考え。安酸は『リラックスできる空間を創造する』に関し、この要素を意識的に用いて使えるようになると、患者の内面深くにある感情に触れることができるようになるとし、このことは先出の梶田が看護教育に求めた「人間に対する本当の洞察力」に繋がるものと考え。

2)【受容的態度】は、PLC要素②『尊重する』⑥『聴く姿勢を示す』⑦『個人的な気持ちを話す』に相応：『尊重する』は、“患者のこれまでの生活経験やその人らしさにも注目することであり、患者の小

さな努力に配慮しつつ、看護専門職者の観察力や洞察力によって患者の強みを見いだそうとする”とある。また、『聴く姿勢を示す』は傾聴が看護介入の方法であるとし、患者が自分の話を聴いてもらえたか否かを感じることが、患者と看護職者との関係を発展する・しないに関係するとしている。傾聴により8割が自分自身で問題を解決するに至るといわれており、“患者が病気について感じたり考えたり望んでいることを語り、看護職者に聴き入れられたと感じることは、患者がみずから変化するきっかけになる”とある。また、『個人的な気持ちを話す』は、看護職者が“同じ人間として感じる気持ちを率直に口にすることで、患者は自分の気持ちをわかってもらえていると感じ、ほっとして身近な存在として親しみを感じ、患者自身も自分の個人的な気持ちを話しやすくなる”とある。調査結果では、＜傾聴＞＜受容＞＜共感＞＜同感＞等が抽出されている。看護職者がPLCを示し続けることが、患者が「聴いてもらえた」、「わかってもらえた」という感覚を抱き、患者が自己表現できる機会を保证することにつながるものとする。また、『尊重する』の、“患者の生き方が反映された価値観や信念を尊重し、患者の変化しうる可能性を信じ、患者の自己決定を尊重する”の意に照らしても、患者の意思を尊重し自己決定を支えるといった患者の権利意識に見合う医療職業人のあり方として大切な視座であるとする。

3) 【向上心】は、PLC要素④『謙虚な態度である』に相応：『謙虚な態度である』は、“看護職者が知り理解していることは、生活を営む患者のほんの一部分にすぎないという知的謙虚は、患者の努力や生活の知恵に驚嘆しつつ、患者から学ぼうとする謙虚な態度を導く”とある。調査結果では＜学習意欲＞＜積極性＞などのサブカテゴリーが抽出された。対象を理解していくには、人間的にも、そして職業人としての力量の成長度によってもみつめ方は異なる。患者中心であること、つまりは患者を生活者として理解したうえで関わることは、自己研鑽や生涯学習を必要とし、看護職者として自己をリフレクションしながら職業人として成長し続けていく存在としての自覚につながると考える。

4) 【話術】は、PLC要素⑩『ユーモアとウィット』に相応：＜話題性＞＜ユーモア＞と調査結果のカテ

ゴリー数としては少数であったが、安酸は、この要素を“意義や必要性は医療や看護の中に広まりつつあり、看護介入の一つとしてその活用が求められている”とする。また、“『ユーモアとウィット』の資源はどこにでもあるとされ看護職者がそれを察知し、どのように活用するかにかかっている。「人、もの、出来事、そして人生一般を見る見方」を通して、その一面を見出すことができる”とし、対話を楽しむきっかけが患者の語る行為の促進につながるものとしている。人間的資質としての柔軟性のある豊かな人間性との関連が考えられる。

5) 【信頼】は、PLC要素③『信じる』に相応：『信じる』は、“看護職者は、患者一人一人の心のどこかによくいたいという希望や願いがあることを信じる。”そして“結果に至った過程やできなかった理由に注目し、患者が正しいと信じることができる”とある。先出の梶田が述べた「患者の側を向いて仕事をする」とに繋がるものであり、これは患者－看護者間の人間関係において重要な核と成り得るものとする。

6) 今回の調査で得られた【パートナーシップ】の内容は、チーム間の連携に関するものが多く、PLCの要素には相応しなかった。本来PLCは「患者教育のための“看護実践モデル”」の重要な構成要素として抽出されているため、直接的に相応しなかったのではないかと考える。しかし、職業的発達の視点から見ると＜責任感＞＜協調性＞＜けじめ＞＜接遇＞＜約束を守る＞などのサブカテゴリーが抽出され、他職種と協働関係を築きながらチームで連携をとり働くことへの自覚や、社会人として必要不可欠な姿勢を意識したものとすることができる。

一方、今回はカテゴリーレベルで検証したため、PLCの要素に直接的に相応しなかったものとして、⑧『共にあゆむ姿勢を見せる』⑨『熱意を示す』がある。今回は本テーマと関連する＜人間的資質＞について、PLCの10要素を指標に検証した。そのため、相応しなかった上記の要素は、もう一方の＜専門的能力＞と位置づけたコアカテゴリーのなかに、＜相手の立場にたつ＞＜患者への関心＞＜支える＞＜見守る＞など、サブカテゴリーレベルでは一部表現されつなげられるものがあつた。

以上のように、PLCを指標に検証した結果、学生

が認識している看護師に必要な姿勢・態度として抽出されたものは、《専門的能力》よりも《人間的資質》に関するものが圧倒的に多く、その内容も患者－看護師関係の基盤をなす人的環境の心地よさに関連する要素が多く抽出されていたといえる。

## 2. 学生の職業的発達とその背景

以上のような調査結果に至る学生の職業的社会化を促した背景を考えると、以下の4点があげられよう。

まず、一つには「実習教育」があげられる。臨地実習は学生にとって初めて社会に出て看護の実際に触れる、きわめて印象的な体験である。舟島は、「学生の主体的な参加を必要とする実習という経験は、自らが積極的に行動を起こしていくことの重要性や意味を理解したり、その行動を起こすための思考様式を獲得するという役割を果たす。また、新しい知識を獲得させ、視野を広げるという役割を果たし、これらは同一性の形成に向けて社会性の獲得という経験となる」<sup>8)</sup>と述べている。実習によって、看護が人間と人間の関係そのものを主体とする職業であることを認識し、人とつながることのおもしろさを実感し、仕事への興味と関心がわき、その価値観や尊さを感じるといった体験が職業的発達に大きく影響したものであると考えることができる。

思考様式を獲得する学習作業としては、日誌やカンファレンスなどが効果的である。学生はそれらを介して日々の看護行為をふりかえる中で、同様に自己もふりかえり、自己の課題を明確化しどんな看護師を目指すのかといった自己への問いかけを行っている。小林は「常日頃から看護実践という経験を丁寧に振り返ることが『自己知<sup>註3)</sup>』を学習する基盤となる」<sup>9)</sup>と述べ、自己の看護をふりかえる中で、自分自身が何を考え判断するのか、またどのような影響を受け行動を決断するのかということに気づき、その判断の背景にある『倫理知』まで学習可能にしているとする。安酸がPLCを実践から学ぶ知に深く関わるものと述べたように、実習体験を単なる体験として終わらせるのではなく、日々の看護行為をリフレクティブシンキングすることによって、看護者としての自己と向き合うこととなり、社会化が促されたものとする。

また、学生は看護者としての自己をふりかえる過

程で、臨床で出会った看護師の姿を指標に専門職者に求められる資質を見出していたことも考えられる。社会学にはロールモデリングという概念があり、古くから職業人養成に向け重要視されてきた。この概念は専門職者としての態度と行動を習得していくために必要な学習方法であり、学習者が専門職者である他者の態度や行動に共感しその人との同一化を通して、これらの態度や行動を取り入れていくプロセスと定義されている。また、ロールモデリングによる学習効果は、「専門職者としての態度や行動の習得である」とされ、「ロールモデリングによる学習には恒久的な効果がある」ともいわれている<sup>10)</sup>。調査が示す実態は、一種のロールモデリングの結果であるとも考えられる。学生は、思考様式を獲得する学習作業やモデリングによる態度や行動を取り入れていくプロセスを通して、職業における社会化の途を進んできたものとする。

次に、「学生そのものが持っているレディネス」があげられる。今回対象とした学生のレディネス(表1参照)は、18～44歳といった年齢幅、准看護師としての実務経験を有する者が22%いるといった背景が特徴的である。年齢や価値観の異なる人々との交流は対人関係技能を向上させる役割を果たすといわれており、社会性の獲得という経験へとつながっていたと考える。

さらに、「学習進度と調査時期」も関係するだろう。2年課程修了前という調査時期は、地域看護学実習を含む領域別実習を終了した後であり、対象を生活者として理解する力を身につけていた。また、リフレクションを意識する機会として有効な看護研究演習等を終了しており、学生にとっては自己の将来像をある程度見通しできる時期であったと考えられる。このことは進学課程の学生に特有な職業に対する志向性の高さとともに、職業的発達を促す因子であったと考えられる。

そして、最後に上述したような学生の職業的社会化を促した前提として、「教育理念」があげられる。学生に対して、入学時の段階で教育目的に『地域社会のなかで主体的に看護が実践できる人間性豊かな看護師を育成する』を掲げ、教育マトリックスを提示していた。そして、折に触れ、学生の到達目標と、教科目、教科外活動との関連や、認知領域、情意領域、精神運動領域と学習効果との関連を意識させる働きかけを行ってきた。このことは学生が自己の学

習の深化を確認できる機会と成り得ていたと考えられ、職業的社会化への動機づけとしては効果的な試みとなっていたものと考ええる。

しかし、一方で、舟島は「看護学生は、青年期における自己の発達課題の達成と同時進行で職業的発達の達成に向かうことはかなり難しく、それを強いられると早期完了、同一性拡散、モラトリアムの状態になる傾向が大きい。人は人としての発達課題に次いで、職業的発達課題に立ち向かうという研究結果が得られた」<sup>11)</sup>と述べている。こうした研究結果は、教育者が青年期特有の学生の未熟性や自我同一性の揺らぎを理解したうえで、学生に段階的に関わっていく必要性を示唆しているものと解する。

## VI. 結 語

2年課程修了前の学生を対象に意識調査を実施し、「看護職者の醸し出す雰囲気や姿勢」として定義されたPLCを指標に検証した結果、以下のことが分かった。

1) 卒業前の学生が、専門職者としての人間的資質として求めたものは、＜思いやり＞＜やさしさ＞＜笑顔＞のサブカテゴリーで構成される【親近感】【第一印象】カテゴリーであった。これらは、患者－看護師の二者関係が成立する最も基本的な視座を捉えることができていたといえる。

2) 学生の人間的成熟を育んだ主な背景として、実習教育、学生のレディネスが確認できた。

看護における職業的社会化にとって必要なこととして、専門職業人としての人間的資質を獲得できるよう、リフレクティブシンキングができる環境を整え段階的に支援する教育システムの重要性和今後の縦断的研究の必要性が示唆された。

## 謝 辞

本調査に協力いただいた銀杏学園短期大学20回生の皆さんに感謝いたします。

## 註

註1)「職業的社会化」：職業人の社会的形成過程のことをいう。ここでいう社会化とは、社会の一

員であるという感覚や、他者と共に生きる力で、社会に巣立つ日を目前にしていよいよ自立した社会人になる最終準備のことをいう。

註2)「リフレクティブシンキング」：Deweyが提唱した「リフレクティブシンキング（反省的思考）」が源になっている。「さまざまな経験を繰り返す過程で、自分の活動をふりかえることによって、その活動の論理を引き出す思考」と定義されている。（教育心理学辞典：教育出版，1996.）

註3)「自己知」：看護職者自身を理解する学習のこと。Carperは11年間に及ぶ看護のテキストや雑誌のなかに示された看護の内容を分析し、看護には4つの「知」、すなわち「知識知」「審美知」「倫理知」「自己知」があると述べている。

## 引用文献

- 1) 梶田穀一：看護教育が高度専門職の教育としてあるには 看護教育新カリキュラム展開ガイドブック No.1. 医学書院，56-62，1996.
- 2) 河口てる子，患者教育研究会：患者教育のための「看護実践モデル」開発の試み，看護研究，36（3）：177-185，2003.
- 3) 井上英夫：健康権と患者の権利，社会福祉研究，第70号：134-143，1997.
- 4) 宇田川廣美：新人に教えることとその視点，Nursing Today，18（4）：30，2003.
- 5) 服部祥子：人を育む人間関係論－援助専門職者として、個人として－，医学書院，94，2003.
- 6) E・オリビア・ベヴィス，ジーン・ワトソン（監訳者：安酸史子）：ケアリングカリキュラム－看護教育の新しいパラダイム－，医学書院，256-281，1999.
- 7) 安酸史子，大池美也子，東めぐみ 他：患者教育に必要な看護職者のProfessional Learning Climate，看護研究，36（3）：225-236，2003.
- 8) 杉森みど里，舟島なをみ：看護教育学第4版，医学書院，172，2003.
- 9) 小林貴子，小長谷百絵，小平京子 他：「看護実践モデル」における「とっかかり／手がかり言動とその直感的解釈」，看護研究，36（3）：192，2003.
- 10) 前掲書（杉森・舟島） 348



11) 同上 171-172

### 参考文献

田島桂子：看護実践能力育成に向けた教育の基礎。  
医学書院，2002.

藤岡完治・堀喜久子：看護教育の方法．医学書院，  
2003.

服部祥子：生涯人間発達論－人間への深い理解と愛  
情を育むために－．医学書院，2003.

舟島なをみ：看護のための人間発達学第2版．医学  
書院，2001.

戸田肇：看護実践能力を育む－看護学的な認識の形  
成と発展過程の法則性が示すもの－（連載1－  
5）．Quality Nursing, 9 (4. 5. 6. 10),  
2003. 10 (9), 2004.

近田敬子：成長し続ける職業人であるために（特

集：リフレクションを意識した看護および教  
育）．Quality Nursing, 7 (8)：653-686, 2001.

青木由美恵：リフレクションの実際－Gibbsのリフ  
レクティブ・サイクルを活用して－．Quality  
Nursing, 9 (2)：147-157, 2003.

岡美智代，伊波早苗，滝口成美 他：行動変容を促  
す技法とその理論・概念的背景．看護研究，36  
(3)：213-223, 2003.

福村幸代：看護婦の専門的態度の潜在的構造分析．  
Quality Nursing, 2 (6)：523-533, 1996.

（平成17年1月24日受理）

大澤早苗，内山久美，横山孝子

〒861-5598 熊本市和泉町325番地

熊本保健科学大学

保健科学部 看護学科

## Occupational Socialization Education through Nursing Students' Views on Professional Development

Sanae OSAWA, Kumi UCHIYAMA, Takako YOKOYAMA

### Abstract

Much of nursing involves direct human to human contact. In recent years, it is said that the personal relationship capacity of nursing students is low. This may be improved by the occupational socialization education in schools. The purpose of this study is to investigate the nursing students' views on professional development. A questionnaire survey was conducted on 39 Licensed Practicing Nurses currently finishing a two-year Registered Nursing accreditation course. Data from the survey was processed using the Kawakita Jiro Method and compared to the Professional Learning Climate Concept (PLC). Subjects chose categories "consideration", "kindness", and "warm expression" to be the foundation of nursing; these categories correlate with the PLC items "sense of closeness" and "first impression". It can be concluded that the subjects of this study regard interpersonal relationships to be the basis of nurse-patient relationships.

An educational system where self growth and reflective thinking concepts are valued need be implemented, thus further research relating to the occupational socialization education and professional development of nurses is needed.